
少女の在処

しろつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女の在処

【Nコード】

N9037K

【作者名】

しろつき

【あらすじ】

部屋の中で、少女の声が静かに響く。ただ声を聞いたただけなのに、彼は痺れるような感覚に襲われた。少女はやさしく彼の手に指を絡める。そして見上げる姿勢から、彼の耳にそっと口を近づけ囁く。「くちづけの味、わたしにおしえて——」部屋いっぱいに満ちた少女の香りと、言葉を失うまでの可愛らしさに、人形師の彼は理想の少女が何処に在るのかを知る。

プロローグ（前書き）

拙い文ですが呼んで頂けたら幸いです。

プロローグ

くプロローグく

彼の望みは小さな願い。

完璧で一点の穢れすら知らず、純真なまま永遠の存在であり続ける理想の少女。

それは曇りなく燦然と光り輝く宝石に、どこか似ているかもしれない。

誰だって簡単に想像できたとしても、決して見たことがないだろう存在。街角で見かけることも、美しいと呼ばれる大富豪の娘たちですらも届かない高みにある。

子供のように無垢な心を持ちながらにして、決して大人の穢れを知ることもない両者の中間にいるような少女。

中間であるからこそ意味がある。

少女はどちらに属してもいけない。

もし明確に属してしまえば、その存在は完璧な少女とは言えなくなる。

すでに有象無象の中に埋もれる少女となんら変わりが無いのだ。故にその存在は誰もが望む理想であり続けた。

現実には居るはずがないのだから、当然でもある。

しかし居ないのなら、と彼は自らの手で作ることにした。

街で美しいと呼ばれる少女を着飾らせ、化粧を施してみる。が…
…上手くはいかない。

二度目は少女を変え、着せる洋服も変えてみたのだが上手くはいなかった。

その後も諦めず何度も、何度もくり返し試みる。

だが、理想には程遠い結果しか出ない。

彼は無きものを想い焦がれることに対して諦めきれず、終着点を

見出せずにいた。人間という生き物は手の届かないものにこそ興味を惹かれるからだろう。

いや、彼の場合は想いに留めるということを自らしなかった。かつて居た彼の妹の為にも、止まることはできない。

すぐさま、彼はもう一度思考をする。

考えて、一つの結果に辿り着いた。

現実には居ないのなら最初から？造れば？いいと。

ヒトに限りなく近いヒトでは無いモノであるならば、夢に見た理想を具現化できると考えたのだろう。それは過信ではないし、ましてや絵空事でもなかった。

彼なら出来る。容姿・記憶・性格・心……どこも余すことなく、理想的と言える状態で創りだせる。

少女であれば、最高の出来で用意できるのだ。

すぐに彼は工房へ籠ると、作業に取り掛かった。まるで、何かに憑かれたかの様なその行為は、日常生活にまで致命的な影響を与えるものだった。

睡眠を取ることも食事をすることも極限まで減らし、持てる全ての技術を少女に使うだけ。

自信の全てを投げ捨てるまでに彼の想いは強かった。

そして身体を作り、心を織り、完成させた。

一人の少女を。

薄暗い部屋を照らす光が、椅子に座る彼女へ当たる。

うすい桃色をした髪はランプの光に当たっていると、そのまま溶けてなくなってしまういそうなほど透き通っていて、彼女の希少さを象徴しているかのようだった。

あどけなさを残す少女の顔でありながらも、整った顔立ちに白く透き通るような肌は、触れてはいけないという不思議な雰囲気がある。

可愛らしい手にある指の一本一本でさえも繊細でいて、そっと触

れなければ折れそうなほど。

彼女の服はふわふわした布と細かなレースに引き立てられ、小さな体によく似合っている。

フリルの付いたスカートの裾からは、ふっくらした太ももが覗いていた。その先に見えるのは、少女らしいすらっと伸びた脚で、ぴんと綺麗に揃えられている。

脚には膝上まで伸びた、白い生地のぴったりとしたオーバーニーソックス。模様のない素朴な上部を、リボンがワンポイントに飾っていても愛らしい。

くっ、と少女の細い顎を持ち上げると、艶やかできれいな髪がふわりと揺れる。

その瞬間、彼女の髪から漂った甘い香りに彼は酔いしれた。

少女は憂いた瞳を恥ずかしそうにうつむかせ、ほんのりとさくらんぼみたいに赤く色づいた瑞々しい唇をしている。

幼いながらも、どこか艶めかしい表情。

少女の持つ儂げな印象とは対照的に、華奢であっても抱き締めればやわらかそうな肉感のある体。

出るところははっきり自己主張をしており、締まるところはきゅっと無駄がない。

しかし、だからといって体が硬いのではない。彼女の歳相応な少女らしいやわらかさに、指が沈むのだろう。

少女は衝撃的で強烈な魅力を秘めていて、彼はしばらく言葉を失ってしまった。そして見とれる彼に、小さな唇は甘い愛を囁きかける。

「ねえ、おしえてちょうだい……」

部屋の中で、少女の声だけが静かに響く。

ただ声を聞いただけなのに、痺れるような感覚に彼は襲われた。

少女はやさしく顎を掴む彼の手に、指を絡める。上目使いに見上げる姿勢から、彼の耳にそっと口を近づけて囁く。

「くちづけの味、わたしにおしえて――」

部屋いっぱいに満ちた少女の香りと、言葉を失うまでの可愛らしさに、

人形師の彼は理想の少女が何処に在るのかを知る。

ブログ（後書き）

ここまでお疲れ様です。よかったらブログの方にもいらしてください。気ままに更新していきます。

ブログ「<http://sirouituki-yoni.blog100.fc2.com/>」

第一夜・少女のアリカ（前書き）

ここから本文です。

第一夜・少女のアリカ

「ん……」

年季の入った椅子が軋みを上げ、嗅ぎ馴れた木の匂いで徐々に眠気が覚めていく。

気が付くと僕は椅子にもたれ掛っていた。

連日の徹夜で疲労が溜まっていたのだろうか、そのままの状態で寝てしまっただけらしい。

「何時だ……？」

まだ重い目蓋を擦りながら、痺れた手を伸ばして懐中時計を見る。いつもなら動いている二つの針が、壊れたらしく完全に止まっていた。

運が悪いな……。これだと時間が分からないじゃないか。

部屋の時計を見ようにも、工房では時間を気にせず作業ができるよう時計は置いていないし。

一応このだるさから結構な時間寝ていたというのは分かるけど。

そう思い、石が付けられたように重い体を無理やり起こして僕が立ちあがった、その時。

「……あ」

求め続けた理想の少女がいた。

ふと、残っていた眠気が一気に覚め、思い出した。

彼女を造りあげた後すぐに僕は寝てしまったのだと。

なぜこんな大切な事に、今まで気づかなかったのだろうか。

僕は自分でも疑問に思ってしまった。

薄暗い部屋の中でランプに照らし出されぼんやりと、少女の輪郭

が浮かび上がる。

ゆっくりとこの場に満ちた妖しい空気に、僕は侵されていく感じがした。

部屋に居るのは彼女と自分の二人だけ。

その事実だけで僕は、期待と不安の入り混じった落ち着かない気持ちになって、胸の動悸が激しくなる。

段々と僕以外にまで聞こえそうに、胸の音は大きくなっていくのだ。

いくら落ち着つかせようとしても、治まる気配がない。

そんな僕の前で、少女は椅子に座り込んでいる。

長く腰の辺りまで伸びたうす桃色の髪には緩やかなウェーブが掛かっていて、とても綺麗だ。加えてその桃色という色が幼い女の子の印象を、より強くさせている。

ゆっくり僕は彼女へ近づいて、顔を覗き込む。

そこにはまるで血のような深紅の赤を溶かし込んだ、ちょうどルビーと同じ宝石色をするつぶらな瞳が見えた。

きちんと睫毛の並びまで丁寧に手入れが行き届いているのが分かる。

鼻は小さくとも筋がすらりと美しく、ぽつりと咲くさくらのような唇が瑞々しい。

雪のように白くきめが細かい肌は、すべすべしていそうだ。

肘掛に置かれた手にある指の一本一本でさえも繊細でいて、優しく触れなければ簡単に折れそうなほど。爪もすべて均等に揃えられていた。

例えるならば、お人形という言葉が少女にはしっくりくると僕は思う。

だけどここの光景を目にしても、現実には残酷な答えを突きつけてくる。

彼女の肉体は、作り上げられたモノであるのだから……。

「……………」

きつと……。

「クスクスクス」

消え入りそうな、小さい笑い声が聞こえた。

僕の聞き間違いでなければ、この二人しかない部屋で聞こえた声であれば、間違うはずがない。

今の声は、

「アリカ！」

「お兄ちゃん？」

僕が大きな声を出してしまった為か、どうしたの？

なんて不思議そうな顔を少女がしていた。

人はあまりに驚いたとき、考えた通りの行動が出来なくなるからだろう。

声を出すのと同時に、自然と僕の足はアリカの元へ駆け寄っていた。

別に自信が無かったわけじゃない。

ただ自分の願った少女を造ることなど初めてだったから、少し不安があっただけだ。

第一夜・少女のアリカー２－（前書き）

前回の続きです。

第一夜・少女のアリカー2

そんな気持ちも、今となっては微塵もないが。

「良かった……」

僕はぎゅっと彼女を抱きしめ、絶対に離さないと言わんばかりに、強く身体を密着させる。

そこでアリカが小さい存在なのだと、改めて思い知らされた。実際に百五十センチ位しか彼女の背はない。

腕の中にいる少女は作りモノと思えない程やわらかく、感触が体温と共に伝わってきてくる。

より一層、僕は胸の鼓動が激しくなるのを感じた。

少女はたおやかな細身に、赤色を基調とした服を纏っている。

とても細かい作りのデザインだ。

白地のブラウスにコルセットを重ねて腰を絞り、さらに前と後ろをそれぞれ違う色のリボンで飾っていた。

前に付けられたリボンは、小さく結んでメインの洋服がよく見えるように、後ろに付けられたリボンは大きく蝶々結びに背中を飾る。赤色のスカートは、桃色をしている手の込んだフリルのもう一枚を裏に敷いた二重構造であり、アンダースカートのこのフリルがスカートの細かい所まで作り込まれているのだと強調させる。

いわゆる、ゴシック調の服だ。

フリル付きのスカートの裾からは、すらりとした太ももが覗いている。少

女らしくすらっと伸びた脚は、ぴんと綺麗に揃えられていた。

さらに小さい装飾であしらわれた、純白の膝上まで伸びたオーバーニーソックス。

ぴっちりした厚手の生地で出来た物を穿いているのが、とても愛らしい。

抱きしめたまま桃色の髪に顔を埋めると、甘い香りがしてきた。彼女の身体の気持ち良さに、意識を持っていかれる。

「苦しい」

腕の中から籠った声が聞こえた。引っ張られるようにして我に帰ると、僕は急いで彼女から離れる。

「あ、ゴメン……」

彼女に言われるまでしばらく離れなかったことに僕は驚いた。

無意識にあのまま抱きしめていたなんて思い、体が動かなかったのだろうか。

僕の手にはむなく彼女の体温と、体のやわらかさだけが残っていた。

離れたついでに、横目でアリカの身体をなぞってみた。

彼女の身体は緩やかながらも、果肉の存在を意識させる曲線を描いたラインで、肢体はほっそりとしているのだが「細いだけ」とは言い切れない。

ささやかな二個の膨らみがブラウスを押し上げており、腰は細く括れ、脚の方は上にいくほど厚みを増していく太ももが、強烈に異性の身体という事を僕に意識させる。

女性の理想像を二分するという「グラマラス」と「スレンダー」、その後者をそのまま形にしたような感じだ。

しかし身長の所為か、大人の魅力を体現するにはあと一步とどかず、少女の状態で踏みとどまっている。

そんな彼女の顔を見ると、憂いた瞳は恥ずかしそうにうつむき、唇はほんのりとさくらんぼみたいに赤く色づいていた。どこまでも初々しくなめらかそうだ。

白い肌に幼いながらも、どこか艶めかしい表情。

大人の様でいながらも、少女であるという事実が僕に背徳感を覚えさせる。

アリカの華奢であるのに、抱き締めればしっかりと肉感のある体。出るところはしっかりと自己主張をし、締まるところはきゅっとして無駄がない。

しかしだからといって体が硬いでもない。

きちんと歳相応の少女らしいやわらかさに、指が沈むのだ。

視線を下に向ければ、短いスカートにオーバーニーソックスを穿くと出来る裾と上端との小さな隙間から、白磁の肌をした太ももが微妙に露出している。

それらが異常なまでの色香を感じさせ、僕は扇情的なこの光景に何も考えられなくなっていた。

「僕は――」

「ん……」

言葉を遮るようにぐつとアリカの柔らかいものが、僕の唇に当てられた。

驚く僕のすぐ目の前に彼女の顔が、閉じられた目蓋と長い睫毛がある。

あまりの突然すぎる行為に、しばらくのあいだ時間が止まった気さえした。

第一夜・少女のアリカー3ー（前書き）

ー2ーよりの続きです。

第一夜・少女のアリカ―3―

何も考えられず呆氣に取られていると、アリカは強引に舌を押し込ませてきた。

ねっとりとした彼女の舌が僕の舌に絡み、混じり合った唾液が僕たちの口を透明な糸でつなぐ。

「ア、アリカなに、を……!？」

「お兄ちゃんはこれを望んだ……」

名残惜しそうにゆっくりとアリカの顔が離れていく。心なしか彼女の頬はうっすら紅く色づいているように見えた。

「そんな筈は……」

「ウソ。これはお兄ちゃんの願い……」

心の奥まで見透かしそうな、大きい瞳でアリカが見つめて来る。

僕は彼女の目をまっすぐに見られなかった。

もしかしたら、彼女の言う事は本当なのかもしれないから。

実際に、心の底である感情がさっきから大きくなるのを感じる。

「ねえ、アリカのことキライなの？」

まるで小さい悪魔のようにアリカは妖艶な笑みを浮かべ、僕の頬を撫でる。

彼女の小さな手がさわさわと触れて来るのが気持ち良い。

「そんなことは……」

所在なさげに視線をうろうろとさせることしか僕は出来なかった。

きっぱりと否定できない辺りが情けない。

「それじゃあアリカも、同じコトお兄ちゃんにして欲しい」

先ほどの行為を思い出させるかのように、人差し指を唇に当てて催促してくる。

なんと甘い罠なのだろうか。

猛毒が徐々に体へ回る様にゆっくりと、だが確実に、心が支配されていくのを感じた。

「出来ない……」

「いいよ。アリカが気分をだしてあげるから」

そう言うときアリカは僕の前に立つと、肩幅ほどゆるく足を広げた。

第一夜・少女のアリカー3ー（後書き）

プロットを失くしてしまったので、途中までですが区切りの良いところまでは続けようと思います。

第一夜・少女のアリカ―4―（前書き）

―3―よりの続きです。

第一夜・少女のアリカ―4―

そして僕を正面に捉えたまま、フリルの付いた赤いスカートのホックに手を掛け、迷うことなくそれを外す。

ぱさっ、と妙に乾いた音をたて中のアンダースカートごとスカートが床に落ちる。

「アリカ……」

「ほら、見て」

ブラウスの長いすそに半分隠されながら、アリカの柔肌をした太ももと、その根元にある白いショーツが見え隠れする。

部屋の明かりが彼女の全身を照らし、より鮮明に肌色をした部分が見えるのだ。

その中で、彼女の挑戦的に釣り上った目つきと、皮肉そうな口元が、僕を誘うかのように思えた。

『本当はシたいくせに』とルビーのように紅い目が訴えるのだ。

「これで気分はでるでしょ？」

「それは……」

「違うの？」

否定しようにも、真っ直ぐに見つめて来るアリカの視線がそうさせない。

どうにか動かせる手も、拒否を示すことが出来ない。いや、しないのだ。

頭で考えられることが実行できなかった。

自分でも気づかない内に心と体が、狂おしいほど少女を求めている。

「ちが……わない」

「そうだよ、お兄ちゃんは見てる。それで色々と想像してる」

アリの口の調にあざける雰囲気はなかった。だけど、皮肉に笑う口元は変わらない。

「気分はでた？」

その問いは答えを期待しているというより、行動で示して欲しいと言っている気がした。

第一夜・少女のアリカー51（前書き）

前回からの続きです。

第一夜・少女のアリカ―5―

誘いの言葉に期待は高まる。

ごくり、と僕の喉が鳴る。思わず唾液を呑み込んでいた。

彼女に口づけをしてしまえば、きっと理性なんて簡単に消えてしまうのだろう。

頭で分かっている僕ももう、止まれそうにない。

我慢していた分だけ反動も大きすぎた。

「アリカっ……！」

彼女の手を思いつ切り引っ張って、身体を引き寄せる。

「乱暴すぎ……。駄目だよ、あせったら」

少しばかり強引だったけど、今の僕にはこれでも優しくしたつもり。

それにこの状況では、焦るなという方が無理だ。

向きあった僕たちは、互いに吐いた息を吸えるほどの至近距離。

この近さにいると、アリカの口からどのような吐息が漏れているのか急に気になった。

少女みたいに甘い匂いなのか、それとも全く別の匂いなのだろうか、と様々な思いが頭を巡る。

「抱きしめるだけ？」

アリカの口元ばかりを凝視していると、物欲しそうな目で見つめられた。

腕の中から上目使いに見上げる彼女は魅力的で、簡単に引き金を

引かれた僕は、強く押しつけるようにして唇を重ねる。同時に空
いていた方の手を彼女の腰に回し、体を近くに寄せた。

視界が彼女で埋まる。

目に映るのは、僅かに濡れた可憐な唇。

想いをぶつけるような荒い行為。でも、唇のやわらかさはちゃんと伝わってくる。

第一夜・少女のアリカー61（前書き）

前回からの続きです。

第一夜・少女のアリカ―6―

「んあ……はあ、強引なのもいいけど……」

「……え？」

僕の疑問は一瞬。

「やさしく、ね？」

それだけ考えれば十分すぎた。彼女の言葉が、僕の心を後押しする。

「……っ」

もう一度。

今度は目を閉じゆっくりと、やさしく同時に重ね合わせる。

すつと強張っていたアリカの肩から力が抜け、僕たちの身体はより密着した。

おかげで胸の少し下辺りに、小さめな二個の膨らみが当たる。

ブラウス越しからでも、やわらかさがしっかり伝わってきた。

段々と僕の体から力が抜けていく。

強引したときと違い、触れ合せているだけなのに想像していたよりも甘く、彼女と心が繋がるようだった。

「……ん、ふあ……」

僕の首元に彼女の腕が回される。頬を赤らめた彼女の顔は、もっと求めているかのように見える。

触れ合わせるだけの行為から、僕は口を塞ぐように唇を押しあて、彼女の口内に舌を入れ込む。

粘性の湿った舌は身をうねらせ、熱く絡み合う。

没頭するあまり、この世界には僕とアリカしかいないと思えるほどだった。

「あ……おに、いちゃ……あっん」

「はあ、アリ……カ……んむ」

そのまま歯の裏側に舌を滑り込ませると、僕は彼女の中を思うままに支配する。

蜜のようにねっとりとした唾液が白く濁り、口の端を伝って零れていく。

少しだけ、ミルクキャンディのような甘い味がした。

第一夜・少女のアリカーター（前書き）

前回からの続きです。

第一夜・少女のアリカー7ー

拒否がないことを確認すると、口内に溜まった液体をアリカの口腔に流し込む。

すると、彼女の方からも舌に乗せて僕の口に運んできた。

薄暗い工房の中で粘着質な水音を鳴らしながら、求めあう。

それを何度も繰り返し返した後、自然と僕たちは二人して唇を離した。

「ーんあ。ふふ、えっち……だね」

「アリカが、そうさせてるんだよ……」

口を液体で濡らしている彼女は、とても蠱惑的だった。

「なら、我慢する必要はなくなっちゃったね」

幼い子供の笑みを浮かべ、アリカは僕の方へと体重を傾けてくる。抵抗をしない僕はそのままベッドへと押し倒され、自然と彼女が上になった。

「痛っ！」

倒れたときにでも足を捻ったのだろうか、鈍い痛みを足首の辺りに感じた。

「あれ？ どこか打ったの？」

心配そうな顔をしたアリカは手を伸ばし、僕の足をさすってくれた。少女の手はすべすべでとてもやわらかい。

少しだけど、痛みが和らいでいくようだ。

「うわ……」

「痛い？ マッサージした方がいいと思ったのだけど」

赤い瞳を大きく見開いてアリカは僕を見つめてくる。

彼女のお陰で痛みは治まったのだが、これは不味い。

触れられた所の神経が、研ぎ澄まされたように敏感になっている。

第一夜・少女のアリカー81（前書き）

前回からの続きです。

第一夜・少女のアリカ―8―

「そうじゃなくて……」

「ふふ、それならよかった」

アリカの唇が、熱い吐息と共に下にいる僕の上をゆっくり動いていく。

身体をなぞる様に腹部から胸へ滑り、首筋に辿り着いた所で止まった。

「これはどう？」

「んあっ……」

閉まりなく開いた口から僕は声を漏らしてしまった。

首筋にかかる熱の籠った息が妙にくすぐったくて、我慢ができない。

心拍数は跳ね上がり、そのまま期待に還元される。

「本当に……かわいい声。もっと聞かせて」

無力に悶える僕の上で少女は顔を朱に上気させ、白い肌は汗でじつとりと湿り気を帯びていた。

「アリカも、お兄ちゃんが欲しい」

どこか瞳の奥に大きな気持ちを秘めている目だった。

とろりと蕩ける様な気分にならずつ変えられていくみたいな感覚。

「あ、れ……」

ぐらりと目の前にあるアリカの顔が斜めになった。気付けば手足に力が入らない。

なんだか頭もぼんやりしてくる。

「気持ちいいでしょ」

薄くルージュのひかれた唇から八重歯をちらりと覗かせて、アリカは笑う。

「寝ちゃっても……いいよ。おやすみ、お兄ちゃん」
霞んでいく視線の向こう、やさしい顔の少女に僕は既知感を覚えた。

僕は、彼女を知っている――。

もちろん僕が造ったのだからそれは当たり前だ。

だけど、その？知っている？ではなくて、もっと違う何かだという気がする。

知っているのは何か……遠くて、懐かしい記憶のかけらのようなもの。

途切れ途切れに僕の脳裏に浮かんでは、またたく間にシャボン玉のように弾けては消えていく。

何なのだろう？僕はいったい何を覚えているというのだ――。

ああ。

言葉にするならこの感覚は、知っているのではなく？覚えている？か。

覚えているのに、知っているのに記憶の在処が思い出せない。
吐き気を覚える気持ちの悪いこの感じは何だというのだろう。

そこでテレビの電源を切るようにぷつり、と僕の意識は途切れた。

第一夜・少女のアリカー81（後書き）

少女の在処、この続きも考えてはいましたが、プロットをなくしてしまったので現在はここまでになります。

ここまで読んでくださった方、気まぐれに読んで下さった方。ありがとうございます。

またお話を載せていく予定ですので、その時はよろしくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9037k/>

少女の在処

2011年10月6日23時37分発行